



当院院長の「子宮頸がんワクチンを受けましょう!」が

2021年『広報ごしょがわら5月号』(pdfページ25)と『広報つがる4月号』

に掲載されました。是非、ご覧ください。



子宮頸がんワクチンを受けましょう!

こどもクリニックおとも 院長 小友 勇人 先生



子宮頸がんワクチン(HPVワクチン)について解説したいと思います。昨年も、加藤レディースクリニックの加藤充弘先生、エルム女性クリニックの佐藤秀平先生が、HPVワクチンの話題を取り上げています。それだけ、産婦人科医にとって切迫した問題であるということです。もちろん、子ども達の将来を担う小児科医にとっても思いは同じです。

ヒトパピローマウイルスは、頭文字を取って「HPV」とも呼ばれますが、子宮頸がんをはじめ、肛門がん・膣がんなどの癌や、性器にイボができる尖圭コンジローマなど多くの病気の原因となっています。HPVは性的接触によって感染します。HPVは感染しても、多くの場合は免疫によって排除されますが、一部では排除できなくて子宮頸がんに行進します。

子宮頸がんは毎年約10,000人が発症し、約2,800人が死亡しています。近年では20代から40代で患者数の増加が著しく、若年者を守る対策が急務となっています。

昨年、大阪大学産婦人科研究グループからショッキングな研究が発表されました。2013年からHPVワクチンの積極的勧奨が止まっていますが、この時期に接種を受けるはずであった2000年から2003年度の4年間に生まれた女子において、17,000人の患者が増加し、4,000人の死亡が増加することが推計されるということです。このままでは、毎年4,000人以

上の患者や1,000人以上の死亡が増加すると推測されます。

HPVワクチンを接種した後に持続的な痛みや麻痺などの症状の報告があつて、因果関係も分らないまま、2013年から積極的勧奨が中止とされてしまいました。その後、名古屋市で行われた数万人規模の調査で、このワクチンを接種していない同じ世代の人にも、同じような身体の不調が、同じ頻度で起こっていることが分かり、このワクチンとの因果関係は否定されています。しかし、その後も接種率は上昇せず、1%に満たない状態です。

世界では、HPVワクチンによって子宮頸がんが減少しており、WHO(世界保健機構)が10年後の「子宮頸がん撲滅宣言」を目指している中、このままでは日本だけが子宮頸がんが飛びぬけて多い国になってしまいます。

小学校6年生から高校1年生までの女子は定期接種として無料で接種できます。ぜひ接種して、子宮頸がんから守ってあげてください。ただし、ワクチン接種だけで100%予防できないので、大人になったら子宮頸がん検診も受けることも必要です。

また、HPV感染は子宮頸がんのほかにも、肛門がん・口腔がん・男性性器がんや、尖圭コンジローマの原因になることから、2020年12月、やっと日本でも男性へのHPVワクチン接種が認められました。